小難しそうな器具とロインの机から成るこじんまりした研究室には、くすんだ匂いと、わずかな潮の香りが漂っている。机上には、一見すればガラクタにしか見えない、漂着物と思しきたくさんの小物と観察器具、そして本や書類が散乱していた。
「……研究で忙しいんだ。用があるなら八秒で話せ」
　ロインは一行を前に腕を組み、面倒臭そうに言った。
「まあそう言うなって。な」
 言った後、ノランが左に捌けるとノアが現れた。
 ノアはもじもじしながら会釈をするとすぐにリアムの後ろにぴったりとくっついてしまった。
 ロインは目をぱちくりさせながら、
「……その人は？」
　ネックは、ノアを手のひらで示すようにして、
「この子はノア。昨日、アリーベの海岸に流れ着いたんだ」
　すると、ロインは驚愕の表情を浮かべ、
「海岸に……？」
　ロインはノアをジーッと眺めて、ぽつりと、
「……生きたまま打ち上げられたのか？」
　その冷たい言葉に、ノアはかすかにびくりとした。
「おいおい、言い方ってもんがあんだろ」
　ノアの様子に気づいたノランが苦く言うと、
「い、いや……すまない。少し信じられなくて」
　ロインは咳ばらいをして、
「アリーベ海岸に辿り着いたということは、彼女はフィネイル海流に運ばれたということになる。それなのに無事でいるというのは、普通では考えられない」
「どういうこと？」
「なるほど、地形か」
　リアムの疑問と、ネックの呟きが重なる。
「そうだ」
　ロインは頷いて席を立ち、壁にピン留めされていた世界地図を持ってきた。雑多な机の上にそれを広げ、「これを見てくれ」と言って、『アリーベ』に面する海域一帯を指差した。
「フィルスト大陸の南、アリーベ。この海岸は比較的穏やかな潮目に接しているが、少し沖に出ると、入り組んだ海底地形の作る、非常に早い流れがある。しかもアリーベ沖の海には、一定の方向に流れる『海流』というか、周期的に流れの方向が変わる『潮流』的な性質があると聞いたことがある」
　ロインの難解な説明に、ネックが頷く。
「えーと……？」
　ちんぷんかんぷんというふうなノランとリアムが同時に首を傾げ、
「つまり……？」
　ネックは海流を表すように地図上で指を滑らせ、
「ノアが漂着したということは、その早くて不規則な流れに、生身で運ばれたということになる。しかもこの海流は海底山脈にも通っているから、もしそこを流れて来たとなると……」
「そう。まるで外傷がないのが不自然だ」と、ロイン。
「ああ。険しい海底崖（ガケ）でダメージを受けていてもおかしくないはずなんだよな」
「……しかし彼女は、こうしてここに生きている。ということは、彼女は何らかの理由で海流の影響を受けなかったか、海岸近くまで船で来たのち、浅瀬で溺れたということになる」
「昨日、俺たちは朝から海岸にいたけどよ、船なんか一艘もなかったぜ」
　ノランの言葉に、ロインは「本当か？」と言いたげな視線をネックに注ぐ。
　視線を受けたネックが頷くのを見て、ロインは「ふうむ……」と、顎に手を当てて考え、
「……ということは、ここ」
　地図上の『アリーベ』から、海を挟んで西……『フィネイル大陸』を指した。
「その名の通り、フィネイル海流は、この『フィネイル大陸』から始まっている。ここに海底山脈を通らないまだ未発見の緩やかな流れがあって、ノアはそれに乗ってきた……？」
　ロインはこめかみをとんとんと叩き、「いや、しかしそれは……」と、ひとりでぶつぶつ喋き始めた。
「あの大陸にはもう人が住めないはずだし、そもそもフィネイル大陸からアリーベまでは、人間が漂流して耐えられる距離ではない……」
　考え込むロインを前に、ネックは、ノランの携えていた麻袋から、一着の服を取り出した。
「ロイン。これ、ノアが漂着した時に着ていた服なんだが……」
　ロインは目線を上げて、
「服……？」
　ネックから、ところどころが焼け焦げているノアの服を受け取って広げた。
「これは……」
「何かの手掛かりになんねぇかな？」
「……独特な刺繍が入っているな。生地も上等だ」
「ああ。俺も初めて見た。どこの民族のものかわからないか？」
　――ネックがそう言った時、研究室のドアを開く者があった。